



中小企業のための OR 研究会

1. 研究を提案した動機

OR 学会の名簿を利用して、企業別入会者数を数えてみると、その多いところは大企業で、しかも首脳陣に OR の後援者がおられるところである。ために、該当する企業数はまことに少ない。株式市場の第一部、第二部上場の会社名はたくさんあることから考えると、OR が会社企業の中に十分に浸透しているとはいいがたいようである。また、OR は会社企業体だけに利用されるのではなくて、政府をはじめ地方自治体にいたる行政組織、農業、林業、水産業などの協同生産体、レジャー産業や知識産業などにも利用適用されて、さまざまな成果を生むであろうと期待されるのであるが、このような団体が、OR 学会にはいっているのを見いだすことは、まことに稀れである。すなわち、この方面にも OR の普及は未だしの感が深い。

OR があまり歓迎されていない理由として、多くのことがあげられると思う。その一つとして、いままでの OR は数学的手法の開拓に多くの智恵と努力とがさかれ、実際例の蓄積にはあまり熱心でなかったことがあげられるのではないかと筆者は考える。企業や組織体は失敗をおそれる。彼らは成功の確率が大きくないと、新しい施策にはなかなかとりつかないものであるし、学問より技術を尊び、多くの経験を統合し、濾過してのち、はじめてみずからの行動を起こすという慎重さをもつものである。であるから、とにかく、OR の実際例を多くつみ上げることが、普及の当面の地固めになるのではないかと、思う。

OR マンを多くかかえた大企業体では、自身が発動した仕事として、OR の実際例をつみ重ねることができし、それらのファイルの中から新しい施策を引き出すことができるであろう。しかし、多くの中小企業体は、みずからの力で OR 的な研究を行ないえない現状であるし、したがって、自身の経営に適した実際例を蓄積することができないでいる。

一方、大企業体側でなされた OR 研究の実際例は、たとえ公表されたとしても、中小企業体には適当で

ない場合が多い。学会の個人会員には、中小企業体に属しておられる方が多い。そして、筆者らは中小企業体を訪問すると、そこはさまざまな OR 的問題に悩んでおられることを見聞する。これらを考えあわせて、われわれは、この学会内において“中小企業のための OR”の実際例的な研究を行ない、その成果をつみ上げる努力をすべきであると結論したのである。

2. 研究の目的

目的を確定するにあたって、(1)中小企業体の定義、(2)“ための”という言葉の解釈、(3)実際例的な問題をどのような形で選定するか、などが討議された。その結果、とりあえず、当面の目的をつぎのように設定した。

中小企業体の経営者のスタッフ的立場で、各種産業に共通と思われる経営的問題をいくつか抽出し、それらを一般化、標準化して、実際例的問題として整理する。“ための”という言葉は“すぐ役に立つ”という意味に解釈する。

これらの実際例的問題が適用されるのであろうところの企業体を、逆に“中小企業体”とよぶことにする。

えられた実際例テーマに研究作業順位をつけ、一つ一つ逐次に数量化、数式化を行ない、現実的なデータをできるだけ使用し、解法を考究する。これらのつみ重ねにより、実際集を編む。

3. 研究会の運営

研究会の発足当初(48年4月)、「OR 学会だより」によって研究メンバーを公募した。約22名の方が応募された。以後、毎月1回の割で、おおむね第3土曜日の午後1時に例会を開いている。毎回14名前後の集まりであり、会場は清水建設(株)の計算センターにご厄介になっていた。秋からは千葉工業大学工業経営学科の研究室(総武線津田沼駅前。東京駅より30分)で開催する計画である。

例会と例会との間に数回の幹事会を開き、研究の推進実務を行なっている。幹事は、大沢聖一(三共精機)、笠原二郎(笠原機械)、鈴木正則(NCR)、伊井 勉(東証計算センター)の諸君である。

研究会の当面の作業は

- (1) 実際例の問題の選定と標準化を行なう
 (2) 中小企業体に対して、経営上の問題点をアンケート調査する
 である。

なお、研究メンバーの中途参加も大歓迎である。筆者 (Tel. 0474-75-2111 千葉工大) か笠原二郎 (0482-95-3000) に申しこまれたい。参加費無料。
 (主査 卜部舜一)



中部支部

1. 47年度下期活動状況

◎保守および取替の問題を特集テーマとして取り扱った。従来、研究会の形態はお話しを聞くといった形が大半をしめていたが、このテーマから会員のおおのこの職場での“ナマ”の問題（未解決でもよい）を出しあい「皆で討論し考えよう」という型をとってみた。

○ヘリコプターの保守作業における保守用機能部品の最適保有量について

村田 秀雄 (川崎重工)

○航空機の保守取替および修理工場の問題

中村 淳一 (三菱重工)

○電力システムの信頼度計算の一例

田中 庸平 (中部電力)

○踏切遮断桿折損の原因究明と、その対策

福島照晃 (名古屋鉄道)

◎新しい試みとして、「47年を回顧し48年の抱負を語る」という課題で新春座談会を行ない、各会員に、その記録を支部ノートとして配布した。

◎支部恒例の秋季ハイキングを鈴鹿地区東海自然歩道で開催した (参加者17名)。

2. 48年度活動状況および計画

◎新しい企画として、支部研究発表会を3月10日 (土) に開催した。午前中を学生の発表 (7件) に当て、午後は一般実務家の研究発表 (6件) を行ない、そのあとで親睦会を開いた。参加者は60名で盛況であった。この研究発表会では、学生側と一般実

務家側の発表内容が、理論編と応用編といったぐあいにはっきり分かれたことが非常に印象的であった。

◎ソ連のパハーニア教授を招き、「無限次元関数空間の測度」というテーマで講演会を開催した。

職位: Professor of Tbilisi State University.

Dean of Department of Cybernetics and Applied Math., Head of the chain of stochastic processes.

◎支部春季ハイキングを瀬戸岩屋堂東海自然歩道で開催した (参加者21名)。

◎合宿勉強会を計画

中部支部でははじめての試みとして、10月25、26、27日の3日間の予定で合宿勉強会を行なう予定である。

◎その他の活動内容 (研究会テーマ)

○物的生産性の指標

吉野 玄一 (東海電気通信)

○バスレーンの実施結果等について

宮崎 正 (愛知県警本部)

○Chance-constrained Programming

清水 栄吉 (南山大学)

○ジョブショップのためのスケジューリングシミュレータについて

秋葉 博 (神戸商科大学)

3. 支部役員の変更

支部幹事の真鍋竜太郎氏が神戸商科大学へ転任されたので、その後任として日比野康文氏を幹事とした。
 (岩田記)